

日付:2014年7月6日／聖書:創世記12:1～9

主題:「迷いと失敗の歩みの中で」

アブラハムは、「信仰の父」と呼ばれるが、しかし決して理想的な信仰者であるとか、人間性が立派で完璧な人であるということでもない。この族長物語で注目したい事は、先ず神の御声に聞くと言うこと。そしてこの物語の中で、神が人々のありようを超えて、平和をもたらそうとされるお方であることに心留めて行きたい。

今朝の箇所の前に「テラの系図」があるが、注目したい記事がある。「サライは不妊の女で、子供ができなかった。テラは、息子アブラムとハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れて」旅に出たとある。自分の長男の嫁が子どもを授けられない体である。当時であれば血筋を絶やさないと重要視され、物を取り替えるかのようにあしらわれて行くのが女性の立場であった。しかしテラは、サライも一緒に旅に出たのである。ここに小さくされた人々と共に歩まれる神の御心を見せられる。族長物語は、そういう愛と平和に満ちた出来事の中から始まってゆく。

このアブラハムの旅とは、私たちに何を問うのか?「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい・・・』』との主の言葉を聞いた時、彼は「主の言葉に従って」その住み慣れたハランの町を出て旅立ったのであった。信仰とは、神の言葉を聞いてそれに従うことにある。御言葉を聞いても、それに従わない者には信仰の世界は始まらない。ここは、神に聞き従う人生という旅のあり方を示しているように思う。私たち一人ひとりの「人生」という旅。ただ、「信仰の父」と称されるアブラハムもまた決して誤りのない賞賛される信仰者とは言いがたく、「迷いと失敗」を繰り返す。当初、「主の言葉に従って旅立った」が、現実の厳しさゆえに主の示す道ではなく、自らの道を歩みだしてしまう。

ここに一つの疑問が出てくる。何故神は、すでにカナン人が住んでいる「この土地を与える」というのか? この聖書の記述が、今現在のパレスチナ、イスラエル間の争いの下になっている。神は「この土地を与える」という時に、その約束の地が誰も住んでいない、自由に使える、豊かな、パラダイスのような所を「与えた」のではなかった。そもそも神は、私たちにそういうものは与えない。アブラムに与えられたのは、すでに住んでいるカナン人との只中に置かれるということ。大多数のカナン人に対して、少数的立場に、神はアブラムを立たせて行こうとされている。カナン人との関係へと招かれている。ここをそのように見て行く時、聖書の新たな視点が生まれて来るかと思う。

しかしアブラムは、すでに住んでいるカナン人と向き合うことを避けた。主なる神は、カナン人からこの土地を奪えとか、争え、という事は言っていない。アブラムが神の問いに気づくには、もうしばらくかかるようだ。

私たちもまた、「迷いと失敗」を犯しやすい。しかし主の御手は、アブラハムを離さなかった。主の御手の中で、「迷いと失敗」を繰り返し、主の忍耐と寛容さの中で、彼は成長させられたと言える。そのアブラハムを離さなかった神は、私たちをも離さないのである。(神谷)